

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	教室外学習と教室内をむすぶ試みと課題 - 上級日本語聴解授業における実践から -
Author(s)	瀬尾, 悠希子
Citation	茨城大学留学生センター紀要, 15: 77-90
Issue Date	2017-02
URL	http://hdl.handle.net/10109/13101
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

教室外学習と教室内をむすぶ試みと課題

— 上級日本語聴解授業における実践から —

瀬尾 悠希子

要 旨

教室外学習は第二言語を学ぶうえで重要であるにもかかわらず、これまで研究者や教師からほとんど顧みられてこなかった (Benson, 2011)。本稿は、教室外学習は教室内での支援によってより実りあるものになるという先行研究に立脚して行った上級日本語聴解授業における話し合い活動と、学習者へのインタビュー調査について報告する。そして、学習者の目標と教室外学習が必ずしも効果的に結びついていなかった点を課題に挙げ、その原因として(1)自己主導型学習を教室外で行なうことへの学習者の意識が薄かったことと、(2)目標を達成するための具体的な道筋を立てていなかったことを指摘する。教師は、教室外での自己主導型学習に学習者の意識を向けたり、目標を設定し、それを達成するために使用できるリソースや方法など自らの状況に合わせた具体的な学習のステップを考えたりする活動を授業に取り入れるなど、教室外学習をメタ的に捉える視点を教室内で養う必要がある。

【キーワード】 教室外学習、教室内での支援、自己主導型学習、聴解、
学習へのメタ的視点の養成

1. 本稿の目的と先行研究

人は様々な場面で言語を学ぶ。例えば、目標言語で映画やテレビ番組を見たり、本を読んだり、音楽を聞いたり、目標言語話者と話したり、教室に通ったりするなどし、言語学習は教室内外を問わず行われている。だが、第二言語・外国語教育研究では教室内で行われる学習にばかり焦点が当てられ、これまで教室外での学習はほとんど顧みられてこなかった (Benson, 2001, 2011)。Benson (2001) は、教室外学習を「独学、自然習得、自己主導型学習を含めた教室の外で行われるすべての学習」(p. 62, 筆者訳) であると定義し、教室内での言語教育を学習者の言語学習

全体の中により効果的に位置づけるためにも、積極的に探究していくべき領域であるとしている。

このような中、教室外での第二言語学習に注目した研究が近年ようやく進められるようになってきた。特に、テクノロジーの急速な発達と普及を背景に、インターネット上のリソースを利用した教室外での学習がどのように行われているかを探る調査が盛んに行われている(欧, 2016)。これらの研究では、学習者が教室外で利用するインターネット上のリソースは、Eメール(欧, 2014a)、音楽、漫画、画像投稿サイト(瀬尾・山口, 2014)、ドラマ(欧, 2014b)、オンラインゲーム(Chik, 2011)など多岐にわたっており、特に目標言語のポップカルチャーがよく利用されていることが明らかになっている。

また、教室外学習がどのように行われているかだけでなく、言語学習に及ぼす影響も明らかにされつつあり、教室外学習が言語能力や自信、楽しさの向上に効果的であることが報告されている。Sylvén and Sundqvist (2012) は 86 名のスウェーデン人年少英語学習者の質問紙調査への回答、言語学習日誌、言語能力テストを分析した結果、英語のデジタルゲームをより使用している学習者ほど英語の語彙知識、聴解能力、読解能力が高かったと述べている。Lai, Zhu, and Gong (2015) は、中国人年少英語学習者 82 名へのアンケート調査と 19 名へのインタビュー調査から、形式を重視した教室内での言語学習を意味重視の教室外での言語学習で補完することにより、目標言語に対する自信をつけるとともに、より楽しんで言語学習に取り組むことができていると結論づけている。

教室外学習が言語学習に及ぼし得るこれらの肯定的な影響に加え、筆者は以下の理由からも教室外学習を促進したいと考えている。第一に教室内だけではどうしても目標言語との接触時間が限られてしまうが、教室外学習によってそれを補えること、第二に学習者の学習目的や興味・関心は多様であるが、教室外学習では各々の目的や興味に沿って使用するリソースや学習方法を選択しやすいこと、第三に学習者はやがて教室から巣立つため最終的には教室外で自分自身の言語学習について決定し管理していけるようになる必要があり、教室外での学習に早くから慣れておくことが重要だということである。

教室外での学習と聞くと、教室内で言語を教えている教師は無関係であると考えがちである。しかし、教室外学習は教室内でのサポートによって、より実りある

ものにすることができる。例えば、Lai, Zhu, and Gong (2015) と欧 (2014b) は、授業で紹介されたリソースや学習方法を学習者が教室外学習に取り入れていることを報告し、教師は様々なリソースやそれらの使い方について情報交換する場を授業中に設けるなど、教室外学習を視野に入れた支援を教室内で積極的に行なっていくことが求められていると主張している。

本稿では、筆者が行なった教室外学習を支援する試みと学習者へのインタビュー調査の結果を報告し、教師は教室外での聴解学習をどのように支援することができるのかを検討することを目的とする。

2. 授業実践

2.1 実践を行った授業の概要

大学の学部留学生を対象とした「学術日本語（聴解）」という教養科目授業で、先述したLai, Zhu, and Gong (2015) や欧 (2014b) らの主張をベースにし、教室外での聴解学習を支援することを目的とした実践を行った。受講者は正規留学生6名、国費留学生4名、交換留学生1名で、人文学部、教育学部および農学部の学生であった。出身は5名が中国、残りは東南アジアと東欧の国々である。正規留学生は日本語能力試験N1を取得しているが、国費・交換留学生はN1からN3とややバラつきが見られた。授業はニュースやドキュメンタリー、学術番組、映画などの生教材を主に用いて行った。教室外学習には授業外で各自自由に取り組むこととした。次節に詳細を示す。

2.2 実践の方法

第1回目の授業で、教室外で日本語を聞く機会を増やすことの利点を説明し、積極的に教室外学習に取り組んでほしい旨を伝えた。そして、授業外で聴解学習を行った際に記入するための記録シートを配布した。記録シートには、日付、視聴したもの、視聴時間、面白さ、難易度、内容についての短い感想を記入する欄を設けた。学習者の自主性に任せるため、行うべき回数や時間は特に指定せず、コースの成績にも含めないこととした。

第5回目、10回目、14回目の授業で20-30分程度を用いて、各々の教室外学習の状況について共有してもらった。各自記入した記録シートを持ち寄り、3-4名の

グループでどのようなことを行ったか、どうしてそれをしたか、やってみて困ったこととそれに対するアドバイスを話し合い、次回の話し合いの時間までに達成したい目標を1つ決めてもらった。10回目と14回目の授業の話し合いでは、前回設定した目標を達成できたかどうか、できなかった場合はどうしてできなかったかも話し合う項目に加えた。グループでの共有の後、グループで話したことをクラス全体に報告してもらった。グループでの話し合いは学習者を中心に進め、教師は話し合いが滞っている様子が見られたときに介入するに留めた。クラス全体の話し合いは教師主導で進めた。

2.3 話し合いの様子

本節では、授業後に記した筆者の授業ノートを元に、筆者が観察した話し合いの様子を報告する。

1回目の話し合いでは、先に述べた4点(どのようなことを行ったか、どうしてそれをしたか、困っていること、アドバイス)を共有することとした。使用するべきリソースは特にこちらから指定しなかったが、学習者の多くはアニメやドラマを視聴していた。数名は声優のトーク番組やニュース、国会中継、医療者用学習DVDのサンプル映像も視聴していた。アニメやドラマ、トーク番組を視聴した理由はほとんどの者が「面白いから、いつも見ているものだから」と述べた。医療者用学習DVDのサンプル映像を見ていた学習者は「将来、医療通訳者になりたいから」という理由を挙げた。話し合いは主に使用しているリソースについて中心に進められ、どのようなものを見ているかが共有されていた。困っている点として、医療用学習DVDのサンプル映像を見た者が「難しすぎてほとんどわからなかった」と述べたところ、医療ドラマを見たほうが分かりやすいのではないかという意見が他の学習者から出されていた。最後に各自の目標を決める際には、ある学習者から「教室の外では楽しんで番組を見ているので、目標を作るのは変な感じがする」という意見があったが、結局その学習者は「今やっていることを続ける」という目標を設定していた。

2回目の話し合いも1回目が続いてリソースの共有から始まった。前回に比べるとアニメやドラマ、バラエティなど「やわらかい」番組を視聴した学習者が増えていた。学期の中盤に入って授業が忙しくなってきたので、そのような番組のほう

がニュースなどに比べて心理的な敷居が低くて見やすいということだった。1回目の話し合いで他の学習者が共有した番組に興味を持ち、見るようになった者もいた。1回目に医療用学習DVDのサンプル映像を見ていた学習者も医療ドラマにリソースを変更していた。困っている点についてはほとんどの学習者が何も述べていないようだったが、安倍首相が言っていることを理解できるようになりたいという理由で国会中継を見た者(=3章で紹介するポーさん)が「全くわからない」と言っていた。それに対して他の学習者から特にアドバイスがなかったため、筆者から新聞や学習者の母語でアクセスできるリソースで事前に政治的な用語や背景を把握するようにしたらどうかと提案した。

3回目の話し合いでは、全員がアニメ、ドラマ、バラエティ、それ以外は数名がニュースを視聴するようになっており、使われているリソースの種類が少なくなっていた。簡単に今回の活動について尋ねたところ、「成績に関係ないので気楽にできて良かった」「たくさんアニメやドラマを見て楽しかった」など概ね肯定的な感想が挙げられた。

3. インタビュー調査

3.1 協力者

学期終了後に、教室外学習についての意識を探るインタビュー調査を受講生を対象に行った。インタビューへの協力は任意であり成績には全く影響しないことを伝え、協力者を募った。その結果、以下(表1)の4名がインタビューに応じてくれた。学習者の名前はすべて仮名である。

表1 インタビュー調査の協力者

名前	性別	出身国	所属学部・学年	留学形態	大学入学前の日本語学習
周	男	中国	人文学部・1	正規留学	独学、日本語学校(中国)、日本語学校(日本)
李	男	中国	人文学部・1	正規留学	家庭教師、大学(中国)、日本語学校(日本)
黄	男	中国	教育学部・1	正規留学	日本語学校(中国)、日本語学

					校 (日本)
ポー	女	ベトナム	農学部 ・ 1	正規留学	日本語学校 (ベトナム)、日本語学校 (日本)

3.2 データ収集と分析の方法

インタビューはすべて筆者との1対1の個人インタビューで、2016年8月に実施した。半構造的インタビュー手法により、日本語学習方法、本コースに対する意識、教室外での聴解学習への取り組みについて中心的に聞き取った。インタビューは日本語で行い、協力者の同意を得てすべて録音した。

分析のため、録音した音声データをすべて文字化し、読み込んだ。そして、調査の目的である教室外学習への取り組みやそれに対する意識に関連する部分を抜き出し、4名のデータを総合的に比較検討したところ、「大学入学以前の日本語学習」「できるようになりたいこと」「教室外で行っていること」「教室外での聴解活動についての意識」というテーマが抽出された。次節では、これらのテーマに関するデータを引用しながら、説明していく。

3.3 インタビューの結果

3.3.1 大学入学以前の日本語学習

協力者達は自国で放送されていた日本のアニメに子どものときから親しみ、それをきっかけに日本語に興味を持つようになった。

筆者：最初に高校のときに自分で勉強してたのはやっぱり（日本語に）興味があったんですか？

周：そうですね、あのときはもうアニメも見てたし。

筆者：あー、みんなアニメ好きですね。

周：そうですね。それがきっかけで日本語勉強始めましたね。

そして、日本語を学習し始めた後も継続してアニメを見たり、アニメの主題歌や声優たちによるラジオ番組を聞いたりしている。

筆者：アニメ好きなんですね。

黄：アニメ好きだから。まあ少なくとも、今忙しいけど少なくとも毎日 //はい// アニメ、まあ1話で20分ぐらいの（を見ています）。

アニメに関連するものを趣味として視聴する傍ら、協力者達は日本の大学に入るための試験に備えた聴解学習を行ってきていた。それは日本語学校の授業であったり、そこで使用されている教材を利用した自宅での学習であった。

筆者：なんか今まで聴解ってどういうふうに勉強してきましたか？

ポー：聴解一。普通の受験のためにCD?で聞くのと一、あーアニメ。

<4ターン省略>

筆者：えっと問題集についでるCDとかは日本語学校のですか？

ポー：あ、なんかそれも日本語学校で聞くのを、いつもそれ入れて聞きました。

つまり、大学入学以前、協力者達はアニメやそれに関連するものを趣味として見聞きすることと、大学に入るための試験対策としての勉強を聴解学習として行なってきていたのである。

3.3.2 できるようになりたいこと

無事に大学入学を果たした現在、協力者達の多くは日本人の学生が話していることをもっと聞き取れるようになりたいと述べた。

筆者：なんか聴解に関して特にこういう力つけたいとか、こういうことがしたいっていうのってありますか？

李：あの、まあ授業のときの内容とか基本的にまあ分かりますけど、日本人同士の会話ってときどき聞き取れない場合が //うんうん// あるんですから、ちょっとそちらの、普通の日本人が喋るときのその聴解の練習がもっとしたいです、はい。

筆者：こう、日本人の学生同士とかですか？

李 : はい、そうです。まあ、授業とか先生が普通に喋ったら分かりますけど、なんか友達同士の会話とかあったらそれ分からないときが。たまに分からなくなり、まあ自分から「え、さっきの話題って何ですか？」みたいに聞くんですから、あのーこういうことは少ないほうがいいんですよ、はい。

また、政治に興味があるものの、今まで受験勉強で他のことをする時間がなかったというポーさんは、日本の政治について理解できるようになりたいと述べた。

ポー : 結構、元々政治のこと好きなんですから、 //そうなんですか// ベトナムにいたときベトナムのニュース毎日1時間見ますが、日本に来たらもう忙しいというか見なかったの、大学に入ったら見ようかなと思って。 //あーなるほどね// だから自分の社会、いま日本にいるのに //うん// ベトナムにいたときよりあんまり日本のこと分からないと思うんですが。 //うーん// 元々ベトナムにいたとき、結構日本のことベトナム語で調べて、それで例えば日本の首相は誰か、内閣には何があるのか分かっていたんですが、 //うん// 日本に来て今の日本の首相誰かしか分からないんですから。

筆者 : あーなるほどね、詳しいことが分からなくなったから。やっぱりそういうことは興味がありますか？

ポー : はい。やっぱり日本に住んでいるのに日本のこと分からないといけないかなと思うんですから。

協力者たちは大学入学のための試験という目標をクリアし、現在は友人とのやり取りをスムーズに行なったり日本の政治状況を知るとい、より実生活に即した目標を意識するようになったようである。

3.3.3 教室外で行なっていることと、教室外での聴解学習に対する意識

では、このような目標を持つようになった協力者達は、教室外で何を行ったのだろうか。

筆者：今言ったようなこと（＝日本人の話が聞き取れるようになる）をやるために自分で何か工夫してるのとかがあってありますか？ま、練習でもいいし、//はい// そんな練習っていうほどじゃなくてもちょっと日常生活で気をつけていることとか、もしあれば。

黄：わたし、あんまり特に練習してません。

筆者：あ、そうですか。

黄：はい。いつも通りに、//うん// うーん、いつも通りにやってますね。//あ、はい// 特に練習してませんねー。聴解の練習は聞くしかないから。//うーんなるほどね// 一人家にいるときまあ、聞くしかないと思ってますね。

このように協力者達は日本人同士の会話が分かるようになるために、とりたてて何かをするわけではなく、とりあえず日本語をたくさん聞いていればできるようになるだろうと考えているようであった。

筆者：なんかその友達の会話とかを分かるようになるために特別に何か気をつけてるとか、こういう練習してるとか、こういうところ工夫してるのとかがあってありますか？

李：まあ自分なりになんかやってるっていうのがあまりないですね。基本的にわたしの考えはそういう会話はもっと聞いて、まあ慣れるしかないんだと思います。

また、日本の政治について分かるようになりたいと言ったポーさんは2.3節で紹介したように、国会中継を見るようにしていた。しかし、国会中継はポーさんにとって難しく、2回目の話し合いの後は見るのを断念していた。

ポー：安倍首相が（言うことが）分かるようになろうと思ったんですから。その理由（＝国会中継を見た理由）は、会議（＝国会）のこと分かれば日本語だいたい完璧かなと思うんですから、けっこう高

いの目標を決めたのかなと思うんですが、やはりなかなか分からなかったもので、まあ、うーん自分の好きなこと（をやることにしました）。〈笑い〉

筆者：あー、もうあきらめた。

ボー：あきらめて、もうアニメと普通の日常の日本語聞こうかなと思って。

授業での2回目の話し合いの際に、ボーさんは国会中継が難しすぎるということ述べたため、まずは専門用語や政治的背景を把握することを筆者から提案していた。しかし、ボーさんはその方法を取ることはなかったようである。

4. 考察

ここまで、教室外での学習を支援する目的で行った話し合い活動と学習者へのインタビュー結果について述べてきた。そこから浮かび上がってきたのは、学習者達ができるようになりたいと考えていることと教室外での聴解活動が必ずしもうまく結びついていないという課題である。インタビューに協力してくれた学習者のほとんどは日本人の学生同士の会話をもっと聞き取れるようになることを望んでいたが、教室外ではそのために意識的に何かをするわけではなく、以前から趣味で視聴していたアニメ関連の番組を見聞きするにとどまっていた。また、日本の政治について理解を深めて国会でのやり取りもわかるようになりたいと考えている学習者は、国会中継を見たが難しすぎたため、目標を達成すること自体をあきらめてしまっていた。

これらの学習者の教室外学習を支援するために、教師は何ができたのであろうか。まず、前者に対しては自己主導型学習を教室外に取り入れるという意識を持たせることができたと考えられる。前述のとおり、Benson (2001) は教室外学習には独学、自然習得、自然な環境での自己主導型学習が含まれるとしている。独学は学習意識を持って学習用に作られた教材を利用する学習、自然習得は指導がない環境で学習意識を持たずに自然に学ぶ状態、自然な環境での自己主導型学習は両者の中間に位置し、指導がない環境で学習意識を持って学習者自身が学習の内容や方法・学習成果の評価のしかたを決定しながら行う学習である。話し合いの際に

「教室の外では楽しんで番組を見ているので、目標を作るのは変な感じがする」という声があったり、インタビューで「特に練習してませんね（黄）」「自分なりになんかやってるっていうのがあまりない（李）」と述べていたように、学習者たちは教室外での聴解活動が学習であるという意識はほぼ持っていなかったことが窺える。また、普段からアニメを娯楽として見ており、言語学習はあくまで副次的な結果だと考えていたことから、アニメやそれに関連するものを視聴することは自然習得の状態として捉えられていたと考えられる。教室内での話し合いの際に、学習意識を持って国会中継や医療者用学習 DVD のサンプル映像を見ていた学習者からは学習する上での困難が報告されたが、その他の学習者からはそのような困難が特に挙げられなかったのも、アニメを見ることで言語学習につなげようという意識が薄かったからではないかと推察される。

また、かれらは大学入学以前は趣味のアニメを見ること（自然習得）と学習用 CD などを用いた試験のための自習（独学）を教室外での聴解学習として行っており、自己主導型学習はしていなかったようである。そして、試験をクリアして大学 1 年生になった現在は、アニメ視聴（自然習得）のみを行っている。教師は、日本人学生が話していることをより理解できるようになりたいという新たな目標を持つようになったかれらに対して、自己主導型学習へ意識を向けさせ、教室外での聴解活動に取り入れるよう働きかけることで、自然習得以外の目標達成への道筋を示すことができたのではないだろうか。もちろんアニメなどをたくさん見聞きすることは、多聴・多視聴の効果が期待できるだろう⁽¹⁾。だが、自己主導型学習という選択肢を提供することは、かれらの学習方法の可能性を広げ、自身ができるようになりたいと願うことを達成するための道筋を自ら作っていくことにつながると思われる。

次に、日本の政治について知るために国会中継を見ていたポーさんは、自己主導型学習を試みていたと言える。だが、彼女はリソースの選択や使用に失敗し、他の方法を試すことなく目標を達成すること自体をあきらめてしまっていた。筆者は予め用語や背景を調べることを提案したが、それもしていなかった。その理由は、一つには話し合いでも聞かれたように大学生活が多忙であったことが考えられる。しかし多忙でも、その中でできる何らかの学習方法を見つけることは可能だったと思われる。自己主導型学習を成功させるためには、学習者が自身で学習の目的、

目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペース、場所、評価方法などを選びコントロールできることが必要である（青木, 2016）。教室内では単にリソースについて情報共有するだけではなく、目標を設定し、それを達成するためにどのようなことを学ばなければならないか、そしてどのようなリソースをどのような方法で利用できるのかなど、より具体的なところまで踏み込んだ話し合いの場にする必要があったと言えるだろう。医療者用学習 DVD のサンプル映像を難しいと感じた学習者がクラスメートからの助言を受けて医療ドラマにリソースを変更していたが、そのような話し合いを増やし、さらにリソースの使い方などまで話し合える工夫が必要であった。そのように教室外学習に対するメタ的な視点を教室内で養い、どのように自身の生活に組み込んでいくかを考えることによって、学習者は多忙な生活の中でも目標に近づくための効果的な学習ができるようになるのではないだろうか。

5. まとめ

本稿では、まず教室外の聴解学習を支援するために行った話し合い活動の振り返りと学習者へのインタビュー調査の結果を報告した。そして、学習者が目標とすることと教室外での学習がうまく結びつけられていないことが明らかになった。その原因には、学習者が教室外での聴解活動を自然習得と捉えており自己主導型学習への意識が薄かったこと、目標を達成するためのリソースの選択方法や使用方法を考えられていなかったことが挙げられた。今後、教師が学習者の教室外学習をより効果的に支援するためには、（1）自己主導型学習を教室外学習に取り入れることへの意識づけ、（2）目標の設定とそれを達成するための具体的な学習方法を考える活動といった教室外学習へのメタ的視点を養うことが必要ではないかと考えられる。

これからの研究課題として、正規留学生以外の学習者にもインタビューを行い、かれらの教室外学習への取り組みと意識を明らかにしたうえで、正規留学生以外にも上記の支援が有効かどうか、また他にどのような支援が必要かを検討したい。また、実際に上記の支援を実践し、振り返りを通してさらに実践の改善を図っていくことも今度の課題としたい。

注

- (1) Warning (2008)、Webb (2015) は多聴 (extensive listening)、多視聴 (extensive viewing) が語彙の増強や聴解の流暢性 (listening fluency) の向上に効果的であるとしている。

参考文献

- (1) 青木直子 (2016) 「はじめに」『ことばと文字』6, 4-9.
- (2) 欧麗賢 (2014a) 「目標言語話者とのメールのやりとりを通じた教室外の日本語学習」『阪大日本語研究』26, 113-137.
- (3) 欧麗賢 (2014b) 「日本語のドラマを利用した教室外の日本語学習のケース・スタディー文脈と学習者オートノミーの相互作用」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会 (編)『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』(pp. 101-112) 東京：ココ出版.
- (4) 欧麗賢 (2016) 「日本語学習者がインターネット上のリソースを教室外の学習に利用し始めるメカニズム－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) による理論構築」『阪大日本語研究』28, 77-108.
- (5) 瀬尾匡輝・山口悠希子 (2014) 「インフォーマル・ラーニング下における日本語学習－独学で日本語能力試験N1に合格した学習者達を事例として」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会 (編)『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』(pp. 87-99) 東京：ココ出版.
- (6) Benson, P. (2001). *Teaching and researching autonomy in language learning*. Harlow, Essex: Pearson Education.
- (7) Benson, P. (2011). Language teaching and learning beyond the classroom: An introduction to the field. In P. Benson and H. Reinders (Eds.) *Beyond the language classroom* (pp. 7-16). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- (8) Chik, A. (2011). Learner autonomy development through digital gameplay. *Digital Culture and Education*, 3(1), 50-64.
- (9) Lai, C., Zhu, W., & Gong, G. (2015). Understanding the quality of out-of-class English learning. *TESOL Quarterly*, 49(2), 278-308.
- (10) Sylvén, L. K., & Sundqvist, P. (2012). Gaming as Extramural English L2 Learning and L2

Proficiency among Young Learners. *ReCALL*, 24(3), 302-321.

(11) Warning, R. (2008). Starting extensive listening. *Extensive Reading in Japan*, 1(1), 7-9.

(12) Webb, S. (2015). Extensive viewing: Language learning through watching television. In Nunan, D. & J. C. Richards (Eds.), *Language learning beyond the classroom* (pp.159-168). New York: Routledge.